

学 会 報 告

システム農学会春季大会

林 岳

平成 18 年 5 月 25、26 日の両日、つくば市内でシステム農学会の春季大会が開催された。システム農学会とは、農学の複雑な問題を解決するため、自然科学系、社会科学系を問わず農学研究者が研究分野の垣根を越えて議論する学会である。私はこの学会の学会員でもなく、過去に一度も参加したことがなかったのだが、今回の大会シンポジウムが「農業農村空間の『機能』を測る、評価する」をテーマに掲げたことから、学会事務局から環境会計についての報告を依頼され、シンポジウムの報告者として初めて参加することとなった。

シンポジウムは、生態景観、地理情報システム (GIS)、経済評価の 3 つのセッションに分けられ、それぞれの手法による農業農村空間の機能評価に関する研究成果が発表された。地理情報システムのセッションでは、国土地理院の長谷川氏が米軍写真から戦後の自然景観をカラーで再現する手法を紹介した。報告では白黒の米軍写真をカラー化し、さらに鳥瞰図を作成した成果が報告されたが、鳥瞰図を動画で見たときは、まるで実際に撮影した映像を見ているかのような素晴らしいものだった。このような分野の研究成果は私も初めて目にするところだったが、GIS の技術とその応用はこのようなところまで進んでいるのかと感じた。

一方、私の報告では、今までの農業における環境会計の研究動向を紹介し、課題点を整理して報告した。先に述べたとおり、システム農学会は農学関係の多分野の研究者が集まる学会であるため、学会員は必ずしも経済評価や環境会計に精通しているわけではなく、今回の報告もなるべく基本的なところから説明してほしいと依頼されていた。私がその依

頼に十分応えることができたかは疑問の残るところであったが、同じ経済評価のセッションで報告した農村工学研究所の合崎氏は、表明選好法による環境評価手法を非常にわかりやすい説明で報告していた。自らの専門分野をわかりやすい言葉で説明することは、研究者にとって非常に重要なことだと思うが、今回のシンポジウム報告では、研究成果を限られた時間で誰にもわかりやすく説明することの難しさを教えられた。

さて、大会当日は快晴で、私は都心からつくばエクスプレスに乗って学会会場のあるつくば市へと向かった。流山おおたかの森を過ぎたあたりから車窓には少しずつ田園風景が広がりはじめ、利根川を渡って茨城県に入ると、見事に青々とした水田が広がってきた。普段田畑を目にすることがない私にとっては、久しぶりの田園風景だった。ところが、どの駅も駅前周辺には真新しい住宅が建てられ、ショッピングセンターやマンションなどの建設も進んでおり、すでに駅前では田園風景を見ることができなくなっていた。シンポジウム終了後の懇親会での雑談で、ある研究者は、つくばエクスプレス沿線の田園風景もあと 10 年もすればなくなるだろうと話していた。開発が進むことはその地域に住む人たちにとって好ましいことなのだろうが、美しい田園風景がまた東京から離れていくのを悲しく思うのは、私が多少なりとも農業に関連する職業に就いているからなのだろうか、それとも単に田舎者であるだけなのだろうか。

畑や水田がどんどん東京都心から離れていく一方で、我が研究所は霞ヶ関周辺への移転計画が進んでいる。都心から遠ざかる田園風景と都心へ向かう研究所。我々の研究所が目指すのは農業の研究ではなく、政策の研究であることを改めて思い知らされた気がした。